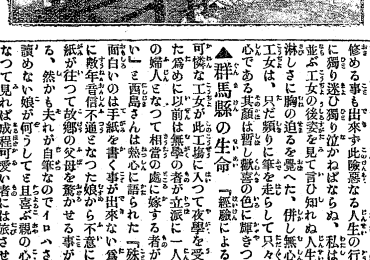
（第三種郵便物認可）　明治四十四年二月十一日　土曜日　第七千二百四十三號　上毛新聞　（三）

## ●佐野の古墳發掘
### 金環其他遺物發見

群馬郡佐野村字上佐野大〇鎮口八郎次郎（ロ）は午前八時頃より自己所有なる同村字等前五百三十一番地の畑に鍬を入れ畑にせんとし開墾せし所に何物か鍬先に當りしより土を掘り探したるに一個の古墳あり中には古刀六振、曲玉一個、矢の根六本、鏃の折れ曲りし物三本、金環二個、寶石大小十數個ありしより八次郎は早速其筋へ屆出たるが同村には大古より中古にかけての遺蹟もありと云へば當時の遺物なるべしと

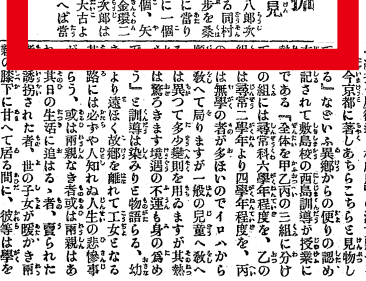


## ●無限の歡喜
### 工女夜學會參觀記

前橋市教育會が毎年の事業とする工女夜學會は今年は北甲館の開製絲所と川町の龍興社とで此月十日から開かれて可なる工女を教へて居る、市役所の齋藤さんの紹介で月白うき一夜、久方振りで佐久間川の源を遡ぼり午前龍興社に赴き見た、南郊は早や白梅の季節といふに赤城颪の何時まで寒むき事哉

▲工女の搖籃　耐内は可成りに廣ろい、中央の機關室には未だ石炭の燃たぎる音物凄く、巨人の如く中天に聳ゆる煙筒からは黑煙の樣な煙が折折の夜風に八方へ散じて居る、纖弱な工女が恐ろしそうな此光景の下に集つて勞働して居る可憐な姿がアリ〳〵と眼に浮ぶ樣だ火の氣もない寒むそうな長い工場の裏手を廻つて眞直に行くと又十間餘りの一棟がある、長がく連らなる障子には隈なく電氣が燈されて中よりは温かい談笑の聲が聞えて何れも樂しそうである、是れが龍興社の夜學所である、工女が將來の搖籃

▲言知れぬ感　授業は今半ばであり、十數歳の一室には七八十名許りの工女、廿歳前後を頭に十三四歳まで行儀よく机に對して鉛筆を走らして居る多分書取りでもあらう、正面の黑板には『綿羽十反御送り成度』の注文狀やら今京都に著しやらこちらと見る物しる」などいふ美鄙からの便りの認め記されて數島彼の西島訓導が授業にである『全体組は甲乙丙の三組に分けの組には尋常二學年程度を、乙の組は尋常二學年より四學年程度を、丙は無學の者が多ほいのでイロハから教へて局も著が一般の兒童へ教へは異つて多少則を用ゐるますが其熱心は驚ろきます境遇の不運も身の爲めの古墳あり中には古刀六振、曲玉一個、矢の根六本、鏃の折れ曲りし物三本、金環二個、寶石大小十數個ありしより八次郎は早速其筋へ屆出たるが同村には大古より中古にかけての遺蹟もありと云へば當時の遺物なるべしと



## ●群馬縣の生命
### 「繭」

前橋市教育會は今年は「繭」の問題を中心として研究する事になつて居るのだ、目下授業は一日置きで向ふ六日間中の一日宛は裁縫を教へて居る科目は國語、修身、算術、十八九の處女が十三四の兩組に雜つてイロハの初めから習つて居るのも健氣ではないか、製絲の生命であるから、前橋市教育會は好い所に目を付けたと云へば『蚕』